



（画像は、今回の物語をベースにAIで作成）

2076年、ベーシックインカム（BI）・ユニバーサルベーシックサービス（UBS）が普及する社会の中、開拓者養成スクールの資格をめぐる対話により生まれた物語です。

BIは、毎月、すべての人に一律の自由に使えるお金が支給される制度。UBSは、教育・医療・公共交通・通信など、生きるために必要なサービスを誰でも無料・平等に利用できる状態としています。最低限の生活が保障されることにより、「なぜ働くのか」「社会に必要な仕事は誰が担うのか」「何を支えに挑戦するのか」などの問いがあらたに生まれていることを想定し、ワークショップを行いました。

ワークショップによる対話の結果、「環境整備総監」と「不透明限界状況突破士」という二つの資格による物語が生まれました。前半三編は「環境整備総監」、続く三編は「不透明限界状況突破士」のそれぞれの対話内容をもとに作成。最後の一編は両者を統合した創作を行っています。

朝の湿地は、思ったより音が多かった。

水面を切る小さな波。葦の擦れる音。遠くで鳴く水鳥。遼は、防水靴のつま先で柔らかい地面を確かめながら歩く。視界の右端には、半透明の表示が三つ、浮かんでいる。

〈案A 居住区拡張…大／湿地影響…中〉

〈案B 居住区拡張…中／湿地影響…小／中〉

〈案C 拡張延期／湿地影響…最小〉

どれにも、同じ黄色い文字が付いていた。

〈条件付き〉

「結局、全部それか」

遼がつぶやくと、耳元のAIが静かに返した。

〈不確実性を含むため、単一の最適案は提示できません〉

「分かってる」

今度はAIに聞かれないよう、口だけ動かした。

湿地の向こうには新しい居住区が見えた。低層の建物が緩い弧を描き、その先に、まだ土色の造成予定地が広がっている。

住民は今すぐ住む場所を失うわけではない。食事も医療も住居も、UBSで最低限は保障されている。それでも、この地域では十年後、二十年後を見越した拡張を望む声が増えていた。子どもが成長しても同じ地域に住める余地。新しい活動の場所。高齢になっても移動しやすい配置。単純に「生きるために必要だから」だけで片付けられない声、声、声。

どこまで開発するかは、簡単ではなかった。

葦の茂みが不自然に揺れ、勢いよく水鳥が飛び出した。大きく翼を広げて羽ばたき高みに向かう。太陽の強すぎる光を遮るシールドで霞がかった淡い空に、長い線が引かれたようだった。

住民達が各々の暮らしのため開発を望むその湿地は、かつての人間達が荒らし、枯らした土地だ。多大な金と時間と労力をかけて水路を戻し、植物が戻るのを待った。ようやく今、昆虫や小動物、鳥たちが戻り始めている。

今日の午後、遼はここに一本の線を引く。どこまでを開発してよいとするか。どこからを保全の範囲とするか。人間の暮らしだけでなく、自然や動物も含めて利益を量り、難しい環境で「どこまでを安全とするか」を定義する。その判断を負い、公表するのが、環境整備総監としての仕事だった。

ぬかるみに保護靴を沈ませながら葦原を静かに歩き、観測杭の前まで来たところで、端末が通知を出した。

〈追加観測を受信〉

〈北東区画…繁殖域重要度 再評価〉

〈評価…低↓中〉

遼は足を止めた。再評価？

「昨日までは低だったじゃないか」

〈夜間観測で、新たな営巣行動が確認されました。ただし継続利用する繁殖域である確度は十分ではありません〉

確定ではない。だが、無視するには重い報告だった。

判断会場は、湿地の外縁にある小さな公開施設だった。壁一面の窓から、造成予定地と葦原の両方が見える。柔らかな午後の日差しが入り込む。

「工事を一年止めても、居住計画そのものが崩れるわけではありません」
保全担当の柴崎が言った。

「BIもUBSも現状で機能しています。付加価値のような開発を求める住民側ではなく、戻せないかもしれない湿地側に立つべきです」
向かいにいた整備担当の南原が首を横に振る。

「一年という数字だけならそうだろう。でも、区画開発を止めれば水路と交通導線の設計を全部組み直す必要がある。次の拡張も連鎖して遅れる。たしかに、今の住民がただちに困窮するわけではない。でも、将来の選択肢を狭めることになって、他の区画との公平性が崩れる」

「どちらも、言っていることは分かる。だから困る。」

開発を止めれば、湿地を守る可能性は高くなる。その代わり、ここで暮らし続けたい住民たちの将来計画を、自分が遅らせることになる。

開発を進めれば、居住区を選択肢は広がる。けれど、新しい観測が本当に繁殖域の回復を示していたなら、工事に着手したあとで「やはり重要だったのだ」と、戻ることはできない。

「どちらも「未来のため」という正義がつきまとう。遼がいちばん重く感じるのが、この終わりのない正しさの競合だ。持続可能性という言葉は便利だ。言えば誰でも納得するだろう。だが、この言葉は誰のためのものかが宙に浮く。何を残して何を諦めるかの線引きの責任を負ってはくれず、遼に最後の判断を押し付け、走り去る。」

遼は中央のAI表示を見た。

「新しい観測を入れて、もう一度」

三つの案が更新される。Aは生態系リスクが上がり、Cは居住計画への影響が上がった。Bはその中間に残った。

「Bが最適？」

「最適の定義が指定されていません」

AIは淡々と、遼を突き放す。

「居住選択肢、生態系回復、建設資源、将来世代への可逆性のうち、どの評価軸を優先するか指定してください」

遼は息を吐いた。AIは逃げているわけではない。正確に、指摘するだけだ。居住選択肢を優先すれば、開発案Aに近づく。生態系回復を優先すれば、Cに近づく。建設効率を重くすれば別の答えになる。限られた観測と演算の中で、AIは比較できるものを比較している。「優先するものを指定してください」と言われ、自分の役目の輪郭が遼を締め上げた。

数字を読むことではない。どの損失なら今の社会が引き受け、どの損失は確定させないのかを、ひとりの人間が線引きする。未来の世界を自分の判断で決めることなのだ。

環境整備総監という肩書が、ひどく重かった。

窓の外では、判断の決定が公開される様を見に来た住民たちが湿地沿いの通路に集まっている。子どもを連れた人も、ペットロボットを抱いた人もいる。反対側の造成地では、工事用ロボットが停止したまま待機していた。

総監の資格を持つ自分は、判断を任されている。人間、自然、動物のどれか一つだけを正解にする資格ではない。その場所で何を安全と呼び、どの損失を引き受けるかを決めるための資格だ。だからといって、住民の将来も、鳥の戻る場所も、魔法のように輝かしい未来へ導けるわけではない。遼はまだ迷っていた。

何かを選ぶことは、何かを切り捨てることになる。全面停止なら、自然を守る側からは説明しやすい。全面開発なら、居住計画を守る側からは説明しやすい。

中間案は、そのどちらからか「なぜなのか」を問われるだろう。

遼は決意した。

やはり、今の観測で湿地の核心部を壊す判断だけは、あとから取り消せない。

「案Bを修正する」

無表情のA I音声と共に画面表示が切り替わった。追加の指示を被せる。

「北東区画を保全域に追加。周縁の造成だけを進める。水路は仮設で固定しない。次の繁殖期が終わるまで継続観測。観測データは公開。再評価で重要度が上がれば、造成範囲をさらに戻す」

開発停止が確定し、南原が眉を寄せた。

「総監、開発の工程がかなり延びてしまいます」

「分かっています。その遅れは、この判断の費用として出しますから」

保全との方針が決まったものの、柴崎も表情が硬いままだ。

「総監の案は先送りでは。周縁なら壊しているのか、なし崩しを狙うのかと言われるかも」

「そうは思っていません。これは保全ラインじゃない」

A Iの提案する折衷案だから選んだわけではない。不可逆な損失を今は増やさないための観察で、その間の工期の遅れと費用の増加の責任を総監として引き受けるのだ。遼は窓の外に目をやった。

「次の判断までの、線です」

最終表示が公開端末へ送られる。

〈開発判断…条件付き〉

〈北東区画…保全〉

〈周縁区画…期限付き施工〉

〈再評価予定…次期繁殖期終了後〉

決定が出ても、会場に安堵の空気は漂わなかった。南原は浚面を作りながら工程表を見下ろし、柴崎は黙々と新しい観測地点を確認している。住民向け端末には、UBS利用の遅れる区画と利用可能な区画が表示された。誰も完全には納得しない結論だった。

だが、遼は少しだけ救われた気持ちになっていた。

もし誰にとっても都合のいい答えがあったなら、自分はそれを選んでいたのだろうか。どんな思いで、決断していたのだろうか。

会場を出て、遼はもう一度湿地の縁に立った。湿り気を帯びた風が、ひんやりとし始めている。水面の向こうでは居住区の灯りがつき、手前では一羽の小さな鳥が葦の間へ消えた。

端末上の境界線は、細い黄色で点滅を続ける。

〈条件付き／再評価予定〉

表示だけを見れば、AIが最初に出した言葉と変わらない。けれど遼の目には、その境界線は同じではなかった。境界線には、どの不利益を今引き受け、どの損失をまだ確定させないか、自分の選んだ未来が点滅の光に織り込まれている。

次に引き直すとき、同じ線になる境界はない。だからこそ、今の決断を伝える者が必要なのだ。役目を背負い、判断し、言葉にして残さねばならないのだ。

総監という仮面を継ぐ存在が、私だった。それだけなのだ。

最終シミュレーションの空が、警告色に変わった。

「居住区北側、酸素供給低下。生態保全区との境界設備も損傷」

凜は表示を追いながら、手元の地図を拡大した。開拓者養成スクールの最終審査。環境整備総監候補として、最後に受ける判断演習だった。総監は、人間の利用だけでなく自然や動物を含む複数の利益を見比べ、難環境で「どこまでを安全とみなすか」を定義する特殊資格だ。

AIは三つの対応案を提示する。居住区を優先して保全区の設備を転用する案。保全区を維持し、住民の一部を移動させる案。両方を縮小運用しながら時間を稼ぐ案。

総監候補になる前、凜は現場技術者として何度も似た会議に立ち会った。凜からの提案はできても、最後に「この案で進める」と署名するのは別の誰かだった。

その責任を引き受ける存在となるため、自分はここまで来たのだ。

凜は三つ目を選んだ。ただし、そのままの採用ではなく、修正の指示を被せる。

「保全区西側の予備電源だけ借りる。生態系維持に必要な最低値は残す。住民の移動は高リスク区画だけ」

〈判断理由を入力してください〉

「全部守れるという前提を捨てる。だが、あとで戻せる余地は両方に残す」
シミュレーションが終了し、天井の空が白に戻った。

〈判断演習：合格〉

〈AI評価：高〉

凜は小さく息を吐いた。ここまで五年かかった。複数の下位資格を取り、現場実習を重ね、ようやく総監審査にこぎつけ、演習評価をクリアした。ようやくだ。

総監の資格はなくても養成スクールのカリキュラムは終えており、住む場所や食事に困るわけではない。今の技術職の枠でキャリアアップも図ることができる。

だが、凜が欲しいのは、守るための資格ではなかった。現場での最後の判断を行い、未来の世界に爪痕を残す者になる資格だ。社会を進めるのか止めるのかを人任せにせず決断し、その結果を引き受けられる人になりたかったのだ。

午後、審査結果が届いた。

〈判断能力…合格〉

〈現場知識…合格〉

〈総合資格…保留〉

凜は最後の一行を凝視した。予想していたものだった。

〈単独現地活動基準…未達〉

左脚の補助フレームを外した状態で、長時間の移動・作業を続ける試験。凜の脚は基準時間に耐えられなかった。普段の現場では補助フレームを使い、何の問題もなく作業できる。予備機もある。それでも総監資格では、支援機器がすべて使えない状況を想定した基準が残っている。

審査室で、制度担当の加納が静かに言った。

「判断演習については問題ありません。現場評価も高いです」

「・・・でも、資格は出ない」

「ええ。現行基準では」

凜は唇をかんだ。

基準が馬鹿らしい、と言い切れれば楽だった。

環境整備総監は、通信も機械も十分に使えない状況でも、人間の安全だけでなく環境全体への影響を見て判断を迫られることがある。補助機器が止まった瞬間に候補者自身が動けなくなった場合、その判断を最後まで引き受けられるのか。そう問われれば、基準を作った側の不安も理解できる。

「この基準は、機器が全面停止した時にも候補者自身が避難行動を継続できるかを見るためです」加納の説明も、凜には理屈が通っているように聞こえた。だから余計に「古い基準だから変えてほしい」と押し切ることができなかった。

開拓者は「一人で何も使わず耐えられる人」だけで編成されてはいない。冗長化された機器、複数人のチーム、遠隔支援。技術が変われば、各々の能力の活かした組み合わせの可能性が増える。

加納が別の画面を開いた。

「特例審査を申請することはできます。補助フレーム使用を前提に、個別に資格付与を検討する制度です」

凜の胸が一瞬軽くなった。他の基準はすべて高レベルでクリアしているのだ。堂々と総監を名乗ることにためらう必要はないはずだ。現場で苦勞したこの五年も報われる。

同時に、別の考えが浮かんだ。

自分だけ特例で通れば、この基準は事例として後に残る。次に同じ条件の候補者が来れば、また「標準から外れた人」として例外扱いされるだろう。

では基準そのものを変えろと言えいいのか。もし本当に、支援機器が全て止まる極限状況でも必要な能力なら、緩めた結果の責任を負うのは誰だ。自分が資格を欲しいからという理由だけで、安全基準を古いと決めつけることもできない。

凜が迷っているのは、自分の意思で合格か不合格かを決めてよいのかという点だけではなかった。自分だけが特例を使って先に通るのか。時間が経っても「実際の仕事に何が必要か」と基準そのものを問い直さなくていいのか。

後者を選べば、資格取得はさらに遅れる。苦勞して待ち続けても、再審査の結果、いまの基準が妥当だと判断される可能性もある。今のチャンスを逃したら、もう二度と総監になれないかもしれないのだ。

凜は、特例申請の画面を閉じた。

「個別特例ではなく、基準再審査を申請します」

加納が顔を上げる。

「補助技術を使うことを前提にした実地評価へ変更すべき、という申立てですか」

「変更すべき、とまでは決めていません。今の基準が、本当に今の現場で必要な能力を測っているのかを、もう一度調べてほしいんです。機器が止まった時の安全も含めて」

加納はしばらく黙ってから、申請欄を開いた。

「その場合、あなたの資格判定は保留のままです」

「分かっています」

端末に二つの表示が並んだ。

〈環境整備総監…未付与〉

〈選抜基準…再審査開始〉

帰宅すると、弟の奏から通信が入った。

「どうだった？」

「まだ取れてない」

「そうか。じゃあ、また受ける？」

奏の声はいつもと同じで穏やかだった。今回の選択をどう受け止めたかは読み取れない。

どう答えれば今の思いが伝わるのだろう。凜は画面に移る奏の顔を眺めた。

生活は明日も変わらない。今の仕事も続けられる。自分が担いたかった役割への道が遠のいたことを突きつけられたのは正直つらかった。

けれど、明日は必ずやってくる。

凜は呼吸を整えた。

「うん。次に受ける時は、試験の方も、少し変わってるかもしれないからさ」

もちろん、変わらないかもしれない。再審査でも今の基準が必要だと確認される可能性はある。

それでも。

もしかすると自分がほしかったのは資格そのものではなく、この資格を選定する顛末を見届けて納得することだったのかもしれない。奏へ話しながら、総監という資格への思いが腹の中でじわじわと輪郭をもってくるように感じていた。

未来の世界に向かう判断を誰が担うのかという重い命題は、それを担う資格者を選ぶ基準から、すでに始まっているのだから。

引っ越し用の箱は、まだ半分しか閉じていなかった。

菜月は居間の床に座り、海上都市の新しい拡張区画の案内映像を眺めていた。窓の向こうには、本物の海が朝の光を反射している。

四日後、菜月と亮、それに美緒は、この新しい東区画へ移る予定だ。今の住居に不満があるわけではない。UBSの住居も医療も教育も十分に使える。だが、新しい区画には菜月たちが選びたい暮らしがあった。歩いて行ける海洋学習施設。小さな共同菜園。亮の活動拠点にも近い。美緒は、新しい部屋から海が見えることを何週間も楽しみにしていた。

端末が鳴った。

〈東区画 安全評価…更新停止〉

〈海況・生態系センサー…一部欠測〉

〈入居・工事…一時停止〉

「止まったの？」

箱の山の間から、美緒が顔を出した。

「一時停止だって。危ないって決まったわけじゃないよ」

そう答えた自分の言葉が、ひどく頼りなく聞こえた。

住民向け説明が端末を通じて展開された。

構造上の異常は確認されていない。ただ、外縁部のセンサーネットワークから一部のデータが届かず、AIが最新の安全評価を更新できない、と簡潔な説明文だった。

危険ではない。だが、安全とも言えない。

菜月は嘆息して説明画面を閉じ、引っ越し予定表を開いた。箱の回収、転居ロボットの予約、美緒の新しい学習拠点への登録。全部が四日後を起点に組まれている。

引っ越しを延期しても、ここでの生活は続けられる。だが、家族で何か月も話して決め、想像をふくらませていた次の暮らしが、突然宙に浮いた感じがした。

この居住区画と拡張区画の間に、果てしない海が覆いかぶさったようだった。

昼の共有スペースでは、住民たちが同じ通知について話していた。

「前回まで安全だったんだから、観測が戻るまで工事だけ止めればいいでしょう」

ひとりの住民が言った。あれは、隣の自治区の藤井さんだ。

「でも、生態系の欠測も含まれてる。外縁部を進めてから影響が分かったら遅いよ」

もうひとりが端末を掲げて主張する。アプリ自警団を趣味で立ち上げた大西さんだ。ニュースが報道されるたびにアプリチェックでハルシネーション・シコファンシーの警報を出している。

公開データには、波浪、構造応力、生態系指標が並んでいた。ほとんどは緑色で正常を示しているが、ごく一部が灰色の「未更新」になっている。

菜月は無表情のまま画面を目で追った。数字を眺めるほど、安心が遠ざかっていった。

「ま、総監がなんとかしてくれるだろうしさ」

藤井さん、また調子の良いことを言ってる。菜月はさらに気持ちを重くした。

こうした状況に対しては、環境整備総監が最終判断をする。人間の暮らしと自然環境の双方を見ながら、観測が完全ではない難環境で「どこまでを安全とするか」を定義する資格者だと、菜月も制度として知っている。

だから総監が「安全」と言えば、公開されたデータと専門的な判断を踏まえた根拠があるのだらうと、菜月は思う。これまで疑ったことなどなかった。総監がいてくれるならと、安心して知識の及ばない領域を、資格者が引き受ける制度は暮らしを軽くしてくれる。

ところが、その判断が自分の引越に触れた途端、「任せる」という言葉が急に重くなった。

総監の存在はありがたい。自分が海底構造や生態系の全データを理解して決めることなどできないのだ。チェックオタクの大西さんだって、無理だ。

知識の及ばないところを誰かに任せるから、社会は動いていける。

頭ではわかっている。だが、自分たちが住む場所のことになると、判断のようすが理解できないことがひどく落ち着きを失わせた。

専門家に任せるしかない。だから安心できる。

専門家にしか決められない。だから不安になる。

相反する感情の間で、菜月の心が千切れそうになっていく。

夕方、住民向けの公開説明が始まった。画面に映った総監は名字と資格番号だけを名乗り、短く状況を説明した。審議の細部は出ない。AIが計算できなかった範囲、現在使える観測値、そして確認できている安全余裕が示される。

隣にいた美緒が小声で聞いてきた。

「総監が大丈夫って言ったら、引越す？」

菜月はすぐに答えられなかった。安全と宣言されたら進みたい。美緒も楽しみにしている。亮も新しい区画の方が通いやすい。延期しても生活には困らないものの、家族で選んだ次の暮らしはまた先になる。四日後を逃せば、当面のチャンスはない。

一方で、データが欠けている場所があると知りつつ引越して、「総監が大丈夫と言ったから」で全部を預けてしまっているものか。もし、後から状況が変わったら、他人の判断を言い訳にして場から逃げるのか。

総監より正しい答えが欲しいのではなかった。自分たちがどの程度の不確実さなら受け入れるのか、自分の側で決められる余地が、ほしかった。

公的表示が切り替わった。

〈東区画 内周部…条件付き安全〉

〈外縁部…継続停止〉

〈未観測区域…入居不可〉

〈再評価…センサー復旧後〉

続いて、入居予定者には二つの選択肢が送られた。

条件付き安全区域へ予定どおり移るか、現在の住居を維持したまま次回評価を待つか。

どちらを選んでも生活保障は変わらない。

「行けるんだね」

美緒の声が弾んだ。

菜月は「そうだね」と答えてから、選択画面を閉じた。

亮が菜月の声色に反応し、顔を向ける。

「待つ？」

亮の問いを耳に受けつつ、菜月は美緒を見た。美緒の顔から喜色が消える。

「うん。私は次のデータを見てから行きたい」

「総監の判断が信用できない？」

重ねて問う亮に向かって、菜月は首を横に振る。

「そうじゃない。条件付きで行けるって判断は、たぶんちゃんとした判断なんだと思う。でも、わたしたちがほんとうに行くかどうかまで、総監に決めてもらう必要はないでしょう？」

菜月は公開再評価への参加登録を押した。今回のデータ更新通知と、住民意見の受付が端末に追加される。

引越しの箱を二つだけほどこき、部屋に戻した。美緒は残念そうにしていたが、ほどなく新しい予定表であれこれプランを立て始めた。

窓の向こうでは、拡張区画の灯りが海の上に浮かんでいる。

行けたはずの場所。まだ行けない場所。それを分断する境界線は、菜月の意思で引いたものではない。けれど、できてしまった境界線に振り回されることはない。どちら側を選ぶのか、また選んだ先でどうするかは、自分で決めて、動くことができるのだ。

この経緯を消さずに、見届けよう。菜月は、静かに登録画面を閉じた。端末の通知エリアには〈条件付き〉と〈再評価予定〉の表示が明るく灯っていた。

峠を越えたところで、車内端末が小さく鳴った。通知画面には「即応案件」の文字が点滅している。直人はAIに状況説明を求めた。

〈杉沢生活圏 UBS基盤：正常〉

〈設備障害：なし〉

〈人間責任者：不在〉

〈推奨措置：集約居住区への移住〉

直人は表示を二度確認させたが、回答は同じだった。

UBSの機能も正常で、設備も壊れていない。運用トラブルも、エリア内での事故や事変も見当たらない。なのに、呼び出しは「不透明限界状況突破士・即応案件」だった。制度やAIが届き切らない現場の最後の隙間で、何が不足しているかを見極め、平時の制度補完から異常時対応までを担う資格だ。端末の緊急色だけが、のどかな山道に妙に浮いている。

この警告は、宇宙港の減圧事故や、山腹崩落で通信網が遮断された集落のような緊急事態で発するものではなかったか。

峠から見下ろす集落は、手入れされた広葉樹の茂る山の合間に田園と果樹園が広がる、のどかな山里だ。窓を開けると風が吹き込み髪を揺らす。ざわざわと木々が擦れる音と、遠くに響く鳥の声が飛び込んできた。

端末が表示した杉沢エリアには、十四人の住民が暮らしていた。診療端末も配送ドローンも自動浄水も動いており、問題は起きていない。ただ、この地域の生活設備を最終確認する人間の保守責任者が三か月前に離任し、後任が決まっていなかった。遠隔AIは日々の運転を続けられる。だが、人間の確認を経ない状態が一定期間を超えると、この地域はUBSの標準運用条件から外れ、地域単位の運用は「暫定」に切り替わる。さらに時間がすぎれば、突破士が「何を生活保障として残すか」を現場で判断しなければならない。

杉沢集落に着いたところで、まず集会所に立ち寄ることにした。

集会所の入口には、移住用のケースが二つ積まれていた。ケースの持ち主は佐々木と名乗った。来週、谷向こうの集約居住区へ移るという。

「診療所が近い方が、私は楽だからね」

佐々木は、むしろほっとした顔をしていた。残ることだけが住民の希望ではないということ、直人は現地に着いていきなり知らされた。

集会所で直人を待っていたのは住民のなかで最も古くから暮らしている井上だった。旧知の間柄の気安さで、直人の端末をのぞき込む。話す口調も砕けたものだ。

「また移住推奨？」

「はい。向こうへ移っても、住居、医療、交通、通信はそのままUBSで継続できます」

「知ってるよ、そのくらい。BIもある。向こうで生活に困らないことくらい、分かってるって。だから、お金とか、便利さとかの話じゃないの」

直人は返事をせず、窓の外を見た。斜面には小さな果樹畑が段々に続き、収穫用ロボットが枝の間をゆっくり動いている。

「毎朝、あそこだね、仲間三人と手入れしてるのよ。もちろん機械だけでも出来るし、人間より上手なだけだよ。三人でなんだかんだとしゃべりながら手入れして、終わったらあー疲れたってここでお茶を飲んでひと休みするのがね。午後は子どもらが遠隔授業のあと、川まで降りていくんで、それを見守っていてね」

「集約居住区でも、同じサービスは受けられます」

「同じサービスはね」

そこで会話が止まった。

端末にはAIが算出した比較が並んでいた。杉沢の維持には、月二回の現地確認要員が必要になる。最寄りの拠点から人を回せば、別の二地域で保守日程が遅れる。集約移住してくれば、他の地域の保守も、生活基盤の安定性も上がる。

移動支援も住居の割り当ても準備済みだ。客観的状况を見れば、迷う理由はなかった。

〈現行維持より移住が安定〉

AIは、もう一度同じ結論を示した。

「AIは間違っていないですね」

直人が言うと、画面を覗き込んでいた井上は笑ってうなづく。

「うん。たぶん正しいよ」

「それでも残りたい？」

「今はね」

今は。直人はその二文字を頭の中でもう一度繰り返した。

ここに一生住ませてほしい、と言われていたわけではない。井上が求めているのは、今日の時点で自分の暮らしを手放すことを、A Iに決められたくない、ということなのだろう。

「ずっと特別扱いしてくれとは言わないよ。来年には気が変わるかもしれないし。体が動かなくなったら、向こうの方が良く思えるかもしれない。でも、それを今日、効率のいい方へ決められるのはね。ちよつと違う気がしちゃうんだ」

直人は権限画面を開いた。不透明境界状況突破士には、生活基盤が制度の想定から外れたとき、現場で何が不足しているかを判断し、U B Sの適用方法を一定期間だけ組み替えて暫定運用を引き受ける権限がある。もちろん、何でもできるわけではない。期限が来れば通常の運営主体へ返すか、上位の制度判断へつながらなければならない。

承認ボタンの横に、A Iが注意を出した。

〈暫定維持を選択した場合、周辺地域の支援・保守計画に再調整が必要です〉

直人は指を止めた。

井上の希望を優先すれば、別の地域で誰かが保守を待つ。杉沢の一部の人間だけを見て、権限を行使することは、公平とはいえない。

では、井上の思いを蹴り、移住を承認すればどうなるか。井上は生活には困らない。サービスもむしろ安定するはずだ。だが、「暮らせる場所は用意したのだ」と説明した途端、井上がこの土地で続けたい暮らしは、暮らしたいという気持ちは、外へ押し出されるだろう。

どちらを選んでも、誰かの都合を切り捨てる。A Iは、その影響をきれいに並べて見せてくれる。だが、どの影響を今ここで引き受けるのかまでの判断はしない。ましてやその責任を負ってはいくれないのだ。淡々と比較情報を展開し、その先の重い選択を、突破士である直人に迫ってくるだけだ。

今日ここで移住を決めれば、井上の選択は閉じる。ほかの選択肢はないのか。

直人はもう一度井上を見た。

「三十日なら、僕の資格で維持できます」

「三十日後には移住？」

「いいえ。移住が確定ではありません。三十日後に、もう一度決めるんです。杉沢を残す案だけじゃなくて、保守を共同化する案や、近隣と担当を共有する案も出してもらおう。UBSとして何を残すべきかも、そのときに見直します。そのときはぜひ、システム側だけでなく、ここにいる人たちも、評価に入ってください」

井上はとまどいをみせ、首をかしげる。

「評価って、私たちが？」

「何を残せば『暮らしが続く』ことになるのか、集落で生活しない僕だけで判断するのは、違うと思うんです」

言ったあと直人は少し不安になった。資格者なのに、決めきれていないだけではないかとも思えてくる。もし三十日後、結局移住になれば、やはり判断を先延ばしただけだとの指摘を甘んじて受け止めなければならぬだろう。

それでも今、井上の選択を閉じないことには意味があると、直人は思いたかった。

少なくとも、その責任だけはAIのせいにはしない。

「それなら、考えるよ。三十日あれば」

井上は穏やかに笑って言った。

三十日という、自分で考えたと思える時間、覚悟を決める準備時間を確保する。杉沢を残す案も、保守を近隣と共有する案も、移住を選ぶ案も検討できる。何をこの地域の生活保障として残すのかも、住民と一緒に言葉にできる。周辺地域の遅れも調整できる範囲に収まるだろう。

直人は暫定維持を承認した。端末が周辺拠点の予定を組み替え、数秒後に新しい画面を表示する。

〈UBS基盤…正常〉

〈標準…問題なし〉

〈例外…本人希望を含め再評価中〉

ひととおり集落を回って確認しての帰り際、集会所の前を通ると、井上たち三人がちょうど果樹畑から戻ってきたところだった。抱えている籠には果実は入っていない。

「今日は収穫作業じゃなかったんですね」

「うん。今日は枝を見ただけ。大半が地味な手入れだよ。収穫は、一瞬だけ授かるご褒美だ」
井上は笑って手を振った。三人はいつものように談笑しながら集会所に入っていた。

直人は車に走り出すよう指示し、端末の表示をもう一度見た。「問題なし」と「例外再評価中」が、同じ画面に並んでいる。

どちらも嘘ではない。

三十日後の再評価という判断が正しかったかは、今の直人にはまだ分からない。井上の思いを受け止めたことで、別の地域の保守を遅らせたという事実も、消えない。

ひとつだけ、本人の決断より先に井上たちの暮らしを終わらせることをしなかった。
それだけだ。

端末は静かに次の予定を表示した。直人はそれを閉じ、峠へ向けて車を走らせた。

月面都市アステリアの朝は、窓の外より先に天井が明るくなる。

紗季が目覚ますと、壁際の生活パネルにはいつもの緑色が並んでいた。

〈酸素循環…正常〉

〈水供給…正常〉

〈医療・交通…正常〉

〈基礎通信…正常〉

その下に、一行だけ黄色い表示が点滅していた。

〈地球向け高帯域交流枠…休止〉

「え」

紗季はベッドの上で身を起こした。今夜は日曜日だった。地球にいる真理と悠斗と、週に一度だけ同じ食卓を囲む日だ。もちろん本当に同じ時間ではない。通信にはわずかな遅れがある。それでも壁一面に向こうの台所が映り、こちらの食卓とつながる高帯域枠は、月へ来てからずっと続いていた。

通知を開くと、通信中継網の一部が保守運用に入り、利用帯域を絞ると書かれていた。代替として、音声と文字の基礎通信は通常どおり使える。

生活パネルの判定は、だから「不足なし」だった。

紗季はしばらく、その二文字を見ていた。

月へ来たばかりの頃なら、酸素も水も切れていないのだから十分だと思ったかもしれない。けれど暮らしが二年、三年と続けば、毎週決まった時間に誰かと会うことも、帰宅して同じ番組を見ることも、生活の一部になっていく。

非常時には切り捨てられるものでも、いつまでも「なくても生きられる」で済ませられるのかは別だった。

朝食を終えて共同通路に出ると、安西が端末を見ながらため息をついていた。

「うちも止まった。地球の合唱練習」

「合唱？」

「月から一人だけ参加してるんだよ。音声だけだと合わせられないからさ」

安西は肩をすくめた。別の住民は、地球の学校とつないでいる工作教室が止まったと言った。

医療回線や物流管制は維持されている。食事も住居も、明日の仕事も困らない。

困らないからこそ、文句を言いにくかった。

「ま、医療が足りなくなるなら、そっちを優先してほしいけどね」

安西の言葉に、紗季も深くうなずいた。誰も生命維持と家族の夕食を同じ重さだと言いたいわけではない。その上で、残った余裕をどう使うかまで自動的に決められることに、少しだけ違和感があるのだ。

家族とは文字で話せる。声も聞ける。わざわざ高帯域の交流枠を戻してほしいと言えば、もっと必要なものを削ることになるかもしれない。

けれど、「不足なし」と言われるたび、胸のどこかが引かった。

生活が止まっていないことと、私の暮らしが続いていることは、同じなのだろうか。

午後、生活区の小さな集客室に、不透明限界状況突破士の野上が来た。故障の復旧だけではなく、制度やAIが拾い切れない生活上の不足を見つけ、現場でUBSの適用方法を組み直すのも突破士の仕事だという。壁面に、都市AIの配分表が映る。生命維持、医療、交通、基礎通信。どれも紗季には削ってほしくなかった。

「高帯域交流は、現行のUBSでは非必須枠です」

野上が事務的な口調で説明を始め、住民たちを見わたす。

「ただ、非必須だから全部いらない、と決めるつもりはありません。高帯域交流を何に使っていいか、教えてください」

紗季は手を挙げかけて、止めた。家族との夕食。身内の話だ。合唱や授業に比べると、とるにたらないもののように思えてきた。

もし自分のために帯域を戻せば、その分だけ別のサービスの余裕が減る。医療や交通に影響が出るなら、そんなことは望んでいない。

けれど、何も言わなければ「生きるのに必須ではないから不要」という分類だけが残る。自分が毎週楽しみにしていた時間は、最初から判断材料にも入らないのか。

黙って諦めるのは簡単で、要求するのは怖かった。

「家族と、ご飯を食べてました」

結局、紗季は言った。

「地球の家族とです。音声でも話すことはできます。でも、私はあの時間を残したい」

野上はすぐには答えなかった。代わりにAIへ尋ねる。

「生活基盤を圧迫せず、地域側で裁量にできる帯域は？」

〈全高帯域枠の一一・八パーセント。利用時間を分散すれば追加可能〉

「その一一・八パーセントを、僕が誰かに割り当てることはできます。でも、それだと結局、僕が『どの普通が大事か』を決めることになる」

野上は住民端末へ新しい画面を送った。交流枠の候補が並び、それぞれが必要な時間を登録でき、重なった部分だけを住民同士で調整する仕組みだった。医療系の余裕を削らず取れるのは二十分。合唱も工作教室も同じだった。紗季の希望した一時間は入らない。二十分はあまりにも短かった。真理が料理を並べ、悠斗がくだらない話を始めたら、あつというまにタイムアップだ。

それでも、紗季は二十分を選んだ。全部戻らなくても、自分たちの「普通」をゼロにされないことの方が大事だと思った。

夜、壁一面に地球の台所が映った。真理が画面の向こうで手を振る。

「今日は短いんだって？」

「二十分」

「じゃあ、悠斗の話は三分までね」

「なんで俺だけ」

三人で笑った。表示の端では、残り時間が静かに減っていく。

二十分が「普通」だとは、紗季には思えなかった。でも、都市が決めた最低限の外に、自分たちで決められる小さな場所ができた気がした。

短い二十分が過ぎて通信が切れた。

生活パネルには相変わらず、気持ちをもやもやとさせる〈生活基盤…正常〉の表示があつたが、その下に、新しい一行が加わっていた。

〈地域選択枠…運用中〉

紗季はそれをしばらく見てから、照明を落とし、横になる。

月面都市の普通は、まだ誰かの選択が続いていた。

「障害なし。故障なし。……人間承認待ち、一件」

悠真は端末の表示を声に出して読み上げ、椅子に座り直した。いよいよ来たか。

不透明限界状況突破士の資格を取って三か月、初めての単独当番だった。開拓地や生活圏で、何が不足しているかを見つけ、UBSの標準運用では拾えない部分を現場でつなぐ資格だ。訓練での想定とは異なり、地域生活支援拠点は拍子抜けするほど静かに回っていた。

AIに各種の状況を確認させるが、どこにも異常は見当たらない。配送ロボットは時間どおりに出ていく。見守りセンサーにも異常はない。生活支援ロボットの稼働率も正常。赤い警告は一つもなく、突破士の承認待ちを必要とするほどの事態はどこからも読み取れなかった。なのに、黄色い札だけが端末の端に残っている。何が起きたのだろうか。

訓練では、通信断、避難支援、複数設備の同時停止といった案件ばかりを扱った。だから悠真は、資格者としての初めての判断は、もっと切迫したものになると思っていた。

承認申請の内容を見て、思わず吐息をもらす。日常の生活時間を一時間ずらしてほしいという要望だった。異常時対応ばかりを思い浮かべていた悠真には、こんな小さな暮らしのずれも「制度が届かない隙間」になるのだと、まだ実感がなかった。

〈例外申請 宮原／支援時刻変更〉

〈標準時刻 18…30〉

〈希望時刻 21…00〉

〈安全上の問題 なし〉

〈公平配分規則 自動承認外〉

「この状況で突破士を呼ぶのか……」

つぶやいたところで、受付の扉が開いた。申請者の宮原が入ってくる。七十代の女性で、歩行補助は使っているが、端末操作は滑らかにこなしていた。

宮原が悠真を見て、初めての顔だねと笑いかけた。

「あなたが今日の責任者？」

「はい」

「若いのね」

「資格は本物です」

言ってから、少し子どもっぽかったと後悔した。宮原は笑っただけだった。

生活支援ロボットは入浴や家事、服薬確認などを必要に応じて手伝う。宮原の標準枠は夕方六時半だった。けれど最近、週二回だけ夜九時に変えたいのだという。

「夜の朗読会に出たいの。終わってからお風呂に入りたいんだけど、六時半に来られると、途中で帰らなきゃいけないから」

「時間変更はできます。僕が例外承認すれば」

「そんなこと、してほしいわけじゃないの」

端末を展開しかけていた悠真は顔を上げた。

「じゃあ、何を？」

「何時なら自分で選べるのか、知りたいの。九時が無理なら八時半でもいい。でも、ずっと六時半って決められてる理由が、私には見えないから」

端末にAIの説明を出す。夜九時に一台を回せば、同じ地区の別利用者二人の到着時刻が十五分ずつ遅れる可能性がある。緊急性はない。安全上も問題はない。

標準スケジュールは全員の待ち時間を均等にするよう固定されている。悠真は、端末に聞かせるように繰り返した。

「例外を承認すれば、今週から九時にできます」

〈承認可能です〉

AI也表示する。

簡単だった。ボタンを押せば宮原は朗読会に最後までいられる。誰かが危険になるわけでもない。資格者として、人の困りごとを解決するなら、それでいいように思える。

だが、悠真の指は、画面の真上で止まってしまった。

宮原の希望だけを特例にすれば、他の二人には十五分の遅れが降ってくる。もちろん、その程度なら許容範囲だと自分は判断できる。だが「宮原の朗読会が他の二人の十五分より大事だ」と決め

てしまう権利が自分にあるのだろうか。逆ならどうか。標準どおり六時半を守れば公平だ。全員が同じルールで動く。だがその公平さのために、宮原は自分の夜の過ごし方を選べない。

宮原は九時を保証してほしいとは言っていない。選べる範囲を知りたいだけだ。いつも六時半なのはなぜか、その理由が知りたいだけだ。悠真が特例を出すことは、宮原の時間を勝手に判断し、自分で選びたいという意図を無視することになるかもしれないのだ。承認するか、断るか。どちらを選んでも、悠真が誰かの時間を代わりに決める構図は変わらない。

「宮原さん」

「なに？」

「九時にする、じゃなくて、選べる時間そのものを増やす方法を試してもいいですか」

悠真はA Iに地区全体の余裕時間を出させた。固定スケジュールを一週間だけ外し、利用者五人が候補枠から希望を入れれば、毎日二つか三つの組み合わせが成立する。誰かの希望が重なった時だけ調整が必要になる。標準UBSの配分方法を、地域限定で本人選択方式へ組み替える案だった。

〈標準運用から逸脱します〉

A Iが警告を出す。

「分かつてる」

〈資格者による暫定運用承認が必要です〉

「それも分かつてる」

悠真は少し苦笑した。自分の権限で宮原の時刻を決める方が、ずっと簡単だった。責任者らしくも見える。選択枠を開けば、利用者同士で希望がぶつかるかもしれない。話し合いも必要になる。運用担当から「余計な手間を増やした」と言われる可能性もある。しかも、うまく調整できる保証もない。それでも、突破士の権限を使うなら、人の代わりに答えを出すためではなく、標準の生活保障をその地域に合う形へつなぎ直し、本人が選べる範囲を広げるために使いたかった。

「一週間だけ、地区選択枠を開きます。宮原さんだけじゃなく、同じ便を使う人全員に希望を入れてもらう。無理な日は無理って出ます。でも、六時半しかない状態ではなくなります」

宮原は端末をのぞいた。

「九時もある？」

「あります。毎回取れるとは限りませんが」

宮原は破顔する。

「それなら十分。自分で選んで、取れなかったなら納得できる」

悠真は暫定運用を承認した。画面の黄色い札が消え、代わりに青い表示が出る。

〈地区支援枠…本人選択運用〉

〈標準時刻…一時解除〉

〈次回選択…利用者入力待ち〉

初めての単独判断で、決定する立場にある突破士の悠真は、結局誰の時刻も決めなかった。それが責任者として正しいのか不安は残る。問題が起きればこの運用を承認した責任は、重く受けとめなければならない。

いまはまだよく言えないが、答えを出すことと、答えを本人に返すことの間には、大きな境界線があるのだ。自分はこれから突破士としてさまざまな人たちと関わる中で、この線引を何度も考えることになるのだろう。

嬉しそうに候補時間を見比べる宮原を目の端におきながら、悠真は、静かな笑みを浮かべつつ、そつと端末を閉じた。

環境整備総監室には、窓がない。

窓の代わりに壁一面にパネル表示があり、朝の火星、南西開拓圏に点在する居住拠点と資源拠点、温室群、実験生態区の状態が、静かな光の帯になって並んでいる。

〈広域安全余力…低下傾向〉

〈高精度演算枠…上限接近〉

〈南縁居住区…暫定UBS補完 継続審査〉

〈推奨…演算枠再配分／一部居住機能の集約〉

美晴は最後の一行を消した。消しても、数秒後には同じ推奨が戻ってきた。

「分かってる」

誰もいない部屋で言う。AIは返事をしなかった。

火星の環境整備総監に就任し、前任から任務を引き継いで四十日。南西開拓圏では、各拠点の日常運用の多くをそれぞれのAIと自治組織が担っている。さらに、複数拠点をまたぐ資源配分や開発・保全、安全条件に関する運営は別途、自治組織をつなぐネットワーク上で運営されている。

人間の暮らし、温室や実験生態区、限られた資源。どれを優先するか、の正解はひとつに絞れない。難しい環境で「どこまでを安全とみなすか」を定める線引が必要であり、そのために環境整備総監という資格が置かれている。

美晴を最初にその資格を有する「最適候補」と出したのは広域AIだった。判断演習、交渉履歴、倫理評価、危機対応、過去の選択傾向。候補者の記録を比較し、美晴を第一候補にした。その後、人間の選考委員会が審議し、開拓圏の代表者たちも合意した。

このような承認プロセスを経て、環境整備総監は任命される。にもかかわらず、美晴が就任した当時は〈女性総監は歴代でも少数〉〈AI推薦首位からの選出〉といった見出しの記事が並んだ。匿名の投稿欄には「AIの通訳なんだから誰でもいい」とも書かれた。目にしなければよかったと、何度もあった。

画面表示でAIが問題視している南縁居住区は、開拓初期の設備を継ぎ足しながら使ってきた古い拠点だった。酸素循環も水処理も動いている。ただし、老朽設備を安全に運用するには、他拠点より細かなセンサー解析と予測計算が要る。

AIの計算資源も、それを動かす電力も無限ではない。

新しい資源採掘区と北側居住区で高精度演算の需要が増え、広域AIは、南縁に割り当てている演算枠を減らし、人の居住機能を新しい拠点へ段階的に集約する案を推奨していた。

一方、南縁のAIは演算枠の割り当て減少に反対している。演算枠を落としてしまうと、古い設備を今と同じ安全基準で監視できない。

どちらも計算を間違えてはいない。だから、美晴の決定が必要になっていた。

明後日の最終協議で美晴は、南縁の暫定UBS補完を正式な運用として認めるか、それとも終了して居住機能の集約を始めるか、環境整備総監として判断しなければならなかった。

その夜、帰宅すると、航がキッチンで何かを焼いていた。少し焦げたような香ばしい匂いがする。

野菜だろうか。成形食でないものを手作業で焼くなんて、今日は何かあったつけ。

「あ、おかえり。四十日記念」

「何それ」

「映えある環境整備総監に就任し四十日、よく生き延びました」

「軽いなあ」

笑ったつもりだったが、顔がこわばっていたかもしれない。航は美晴の様子には頓着せず、鼻歌を歌いながらテーブルに皿を並べ、盛り付けを始めた。

総監就任が決まった日も、航は明るく喜んでくれた。

「すごいじゃん！さすがだね！AIにも人にも選ばれたってことでしょ。美晴が舵取りすることになったら、BIもUBSも安定するね、よかったね！」

知人の中に昇進の差が出てぎくしゃくする例も多く見てきたから、美晴にとって、航の明るさは救いだった。だが、そのありがたさを素直に受け取れない自分もいて、みぞおちの上辺がむずむずしてくる。

航と家族をつくる話も、就任前にはしていた。総監の任期と、子どもを持つことと、その先の暮らし。何ひとつ消えたわけではないのに、全部が遠くなった気がする。私で、いいのだろうか。女性だから選ばれたのか。AIに扱われやすいからなのか。現場経験も薄い自分がこんなところにいるよいか。いくつもある不安が堂々巡りする。

航は、焼いた野菜を盛り上げた大皿から上手く焼けたものを小皿に取り分け、美晴に渡した。

「明後日の、会議が、気になってる？」

「まあね。ひとつの拠点だけの話じゃないから」

機密に触れないよう、美晴は慎重に答えた。

「数字を見ても、分からないものなんだね」

「数字は分かるよ。分かるから、困るの」

航は美晴の顔をみてゆつくりと瞬いた後、目を伏せて大皿の焦げた野菜を自分の小皿に移した。

「そっか。じゃあ、見てくれば？」

「何を」

「んー。数字に入っていないところ？」

航は首をややかしげ、目を細めて微笑む。いつもなら救われるその明るさが、今夜は美晴を追い立てた。思わず声が固くなる。

「明後日なんだよ。私が決めるんだよ」

「うん。そうだね。だから明日が休みなんですよ。行っておいでよ。気になってるところへ」

翌朝、美晴は開拓者養成スクールの研修見学校を使って南縁居住区へ向かった。

総監課程に進んだ者も、資格取得後も現場を見に来ることはできる。今回は公務ではなく、休暇を使った個人的な見学だ。

折り目も新しい研修用の作業服に着替え、髪を後ろで束ねる。帽子にゴーグル、手袋、ブーツを着用して鏡の前に立つと、どこにでもいそうな新入りの研修生が映っていた。

環境整備総監から情報発信する際は公式映像を経由する。輪郭補正も照明補正も入っているから、総監本人を肉眼で見たことがある人は開拓圏でも多くない。受付の若い職員は、美晴の顔を見ても何も反応しなかった。

「見学？ スクールの単位のじゃなく？」

「はい。環境整備総監課程です。個人的に、現場をもう少し見ておきたい」

受付職員はどこかに連絡をし、短いやり取りのあと、そのままそこで待つようにと美晴に伝えた。案内役として現れた男は、久世と名乗った。五十代後半。〈不透明限界状況突破士〉のロゴが入った制服を着ている。袖を肘までまくり上げ、端末を腰にぶら下げている。傷だらけのゴーグルを帽子に寄せ上げ、美晴をまじまじと見た。

「総監課程か。珍しいな。現場なんて、見ても余計に分からなくなるぞ」

「突破士——不透明限界状況突破士の方ですね」

「一応な。資格制度ができた年の初代組。スクールは三期」

「ベテランですね。環境整備総監も受けられたことあるんですか？」

久世は顔をしかめた。

「いや、受けたことはない。俺が知ってるのは、ここみたいな現場だけだ」

南縁居住区は、広域AIの地図で見るとずっと密度が濃く、情報が多かった。

一世代前の循環設備の脇を通ったところで、美晴の端末の警告音が鳴った。画面には、いつもの高精度予測ではなく、簡易監視へ切り替わったことが表示されている。

〈高精度演算枠…一時縮退〉

〈次回詳細予測…二十七分後〉

久世は耳を澄ませるようにポンプへ近づく。前方からもうひとり、〈不透明限界状況突破士〉のロゴ入制服を着た職員がやってきた。久世よりは一回りほど若いその職員がセンサーを手動確認し、整備ロボットへ巡回順の変更を指示している。

「AIが止まったわけじゃないんですね」

美晴のつぶやきに、久世が答えた。顔は指示を出す職員のほうに向けたままだ。

「止まっちゃいない。今は計算を他へ回してるだけだ」

「その間の解析はどうしているんですか」

「俺らが見る」

「人間が見る？ それで安全は確保できるんですか」

「その安全と、不透明な状況の限界をどう見極めて突破するかが、俺らの仕事だよ」

久世の端末に光の帯が浮かび上がった。

〈南縁居住区・暫定UBS補完〉

美晴は思わず息をついた。

「不透明限界状況突破士って、現場の保全が役割だと思っていました」

久世は吹き出した。

「修理屋が長く居座れば平和だろうねえ。火星はまだ開拓期が残ってるし、事変のときは状況が緊迫するから、調査も駆除も救助も何だっただけあるさ。先の見えない状況で迷ったときに、何をしたらまずいのか、何をするのがましなのかを決めて、腹をくくるのが、突破士だ」

酸素が足りないのか。人手なのか。計算なのか。移動手段なのか。住民がここで暮らし続けるために、標準のUBSでは何が届いていないのか。不透明限界状況突破士はそれを見つけ、資格の範囲で生き残りにつなげていく。手に負えない規模だとわかれれば、すばやく上へ投げる判断を出し、制度が届くまでの間をつないでいく。久世が美晴へ向き直った。

「南縁は演算枠が足りなくなってるから、人間の巡回を増やして安全をつないでる。これを正式なUBSの選択肢にしてくれて、ずっと上げてる」

美晴は、明日、自分が判断する案件の、現場側の申請画面を思い出していた。

久世は一台の古いポンプを指した。

「こいつ、数字の上じゃ交換時期を過ぎてる。でも交換すると三日止まる。止めると隣の居住棟を移さなきゃならん。だから、演算と人の目とロボットを組み合わせで持たせてる」

美晴が端末を操作し、データを確認する。

「広域A-Iは、居住機能を新しい拠点へ集約した方が、安全余力が上がると出しています」

「だろうな」

「反対しないんですか」

「俺は、南縁に残してほしいよ。ここで暮らしてる人の顔を知ってるから。だがな」

久世は少し間を置き、かがんでポンプをのぞきこんだ。

「俺が知っているのは、南縁の人たちの顔だけだ。北の拠点で、誰が何に困ってるかは知らん。新しい採掘区がどれだけ計算を食うかも知らん。俺の言う『残せ』は、南縁だけの都合だ。全体のバランスをとるのは、あんたら環境整備総監だ」

美晴は久世の背中に向かって声を絞り出す。

「環境整備総監だって、全部は見えません」

「そりやそうだろ。全部見える人間なんかいたら、その方が怖い」

「AIなら、広域も見ています」

「見てるな。俺より何万倍も」

「だったら――」

その先が続かない。

久世は美晴に背を向けたまま、古い配管に目を落とし、独り言のようにつぶやいた。

「昔は逆だったんだよ。AIを信じすぎるな、ってみんな言ってた」

スクール創設から間もない頃のことだ。資源をめぐる国家間の対立が激しくなり、輸送も開拓も防衛もAIなしでは回らなくなった。その最中に、複数地域のシステムが連鎖的に異常な判断を返す大規模AI異常が起きた。原因は今も一つに定まっていない。意図的な攻撃だったという説も、人間側の設定競合だったという説も、AI同士の相互干渉だったという説も残っている。そのあたりの歴史は美晴も知識として学んでいた。

「初代の不透明限界状況突破士って、AIを止める仕事だったんですか」

「そんな格好いいもんじゃない」

久世は首を振る。

「AIを止めたら止めたで、人間が間違える。計算が戻るまで、誰に酸素を回すか、どの居住区を閉めるか、何が足りないかを、地道に一つずつ拾っていっただけだ」

少し先の設備で、研修生の作業を着た若手が整備ロボットへ同じ指示を何度もやり直させている。久世はその姿に目を向け、言葉を継ぐ。

「今の子は優秀だよ。俺らより知識もある。でも、最初から仕組みがあるからな。なんで人間が最後の判断を担っているのか分からんまま、AI操作と判断の資格だと思ってるやつもいる」

「久世さんは、分かりましたか」

「分からん」

即答だった。

「俺が知っていると云えるのは、ここの音と、ここの人たちの顔と、自分がやらかした案件くらいだ。分かったことなんてない。足りないものを拾って、上へつなぐ。それだけだ」

久世は体を起こし、配管から手を離れた。幼子をなでるような、いや、年寄りをいたわるような手の動きだと、美晴は思った。

「それで、怖くないですか」

久世は黙ったまま空を見上げた。美晴も黙った。遠くに研修生の声がかすかに聞こえる。

「神さまってのはさ、見てるだけで助けてなんかくれないんだと思うよ」

美晴は目を瞬いた。

「宗教の話ですか」

「違う違う。俺は特定の宗教なんか持っていない」

久世は笑って美晴を見る。

「人間もAIも、全部は見えない。だから間違うし、見える範囲でじたばたするしかない。もし神さまみたいに全部見えてる何かがあったとしても、たぶん答えなんか教えてくれないよ」

「じゃあ、何をしてくれるんですか」

「見てるだけだろうよ。いいじゃないか。誰かが見てってくれるってだけでも、じたばたのしがいがあるだろ」

久世が目を細めて研修生とロボットのほうを見やる。

「俺ら突破士だって、あんたたち総監だって、それぞれが見えた範囲でじたばたして、それぞれの権限で判断しては失敗して、それでもまた立ち上がって考えるんだ。そんな人間を奇跡のように助けてくれやしないが、最後まで見続ける度量くらいはあるだろ。なんたって神さまなんだから」

美晴も、久世と並んで、同じ方向を見る。

「それで、いいんでしょうか」

「知らん」

久世はにたりと笑って美晴と目を合わせ、自分の胸を親指で軽く叩いた。

「総監に、聞いてみてくれ」

帰りの連絡艇で、美晴は窓際に座った。端末には、明日の最終協議資料が届いている。

〈広域AⅠ推奨…演算枠再配分／居住機能集約〉

〈南縁AⅠ推奨…高精度演算継続〉

〈不透明限界状況突破士提言…人間巡回併用型UBS補完の正式化〉

〈環境整備総監判断…未入力〉

最後の一行を見るだけで胸が重くなるのは、これまでと変わらない。

久世に会っても、何も答えは見つからなかった。むしろ現場を見たことで分からないことが増えた。南縁のポンプの音を知った。人の巡回で計算不足を補っていることを知った。だが、北側居住区の暮らしはまだ知らない。新しい採掘区の事情も、実験生態区が必要とする電力も、自分の目では見ていない。全部を見て、分かってから決めることなど、たぶん永久にできない。

環境整備総監は、見えないものがあることを背負ったまま、線を引くのが仕事なのだ。

端末が鳴って、航からメッセージが届いた。

〈帰り、遅くなる？ ご飯あるよ。もう食べちゃったかな？ 無理なら明日の朝にでも！〉

美晴はしばらく画面を見つめた。相変わらずの明るさだ。自然と笑みがこぼれる。

環境整備総監がどう判断しようが、人々の日常は続く。夕飯の話をする人。家族をつくる未来の相談。みなそれぞれに、自分の見えるもののなかで、じたばたとあがいている。

久世を真似して、窓越しに空を見上げてみた。火星特有の薄い空の向こうに、小さな光が一つ浮かんでいる。美晴の生まれ育った地球だ。遠すぎて肉眼ではただの光の粒だが、美晴の目は蒼い姿を捉えていた。

明日、美晴は環境整備総監としての判断を下す。どちらを選んでも、誰かの不安は残るだろう。

選んだあとで別の問題が始まるかもしれない。正解は、たぶんない。だからこそ、何を見て、誰の話を聞き、何を引き受けるのかを、自分で決めるしかない。

久世は南縁で、明日も足りないものを拾うだろう。美晴はその報告を受け取り、開拓圏全体を見て線を引く。その線がまた誰かの現場へ返っていく。問いは残り続ける。ただ、ここに居るのなら、見えないものがあることから逃げずにいたい。

美晴は画面を閉じた。蒼い星は、遠く、静かに光っていた。